

学会報告

経済理論学会第52回大会

須田 文明

本大会は、2004年10月23～24日に、大阪経済大学を会場にして開催された。共通論題は「現代と市場 経済学は市場をどう見るか」というテーマが掲げられ、芳賀健一先生（新潟大学）、角田修一先生（立命館大学）の司会の下で、大西広先生（京都大学）、佐藤良一先生（法政大学）、森岡孝二先生（関西大学）の三人の報告者が報告された。また、国際色豊かに、Globalization under Market Fundamentalism という分科会では、カナダやイタリア、台湾、韓国の経済学者たちの報告があった。さらに、記念講演として、日本でもすでにいくつかの邦訳書がある、S.サッセン氏（シカゴ大学）による Globalization or denationalization: Comparing Research Strategies という報告がなされた。筆者の印象で言えば、経済のグローバル化の結果として、諸国の経済システムが唯一の「ベスト・プラクティス」へと収斂するようなことはなく、様々な経済システムが共存し、だからこそ青木昌彦氏らの比較制度分析のようなアプローチが可能となるのであろう。このことの確認は、農業経済研究にとっても決定的である。今次のWTO交渉が始まる前に、EU側は（農業の）「欧州モデル」について盛んに強調していた。グローバル化にもかかわらず、複数の農業モデルが共存できるというのである。我々にとって興味深いのは、こうした農業モデルが、各国・各地域のそれぞれの経済システムとどのような制度補完性を持ち得ているか、あるいはないのかを分析することである。

さて、本大会への当研究所からの参加は筆者のみであった。筆者は「経済学における認知主義的転換と解釈学的転換：コンヴァンションナリストの場合」というテーマで報告を行った。近年、認知科学や実験心理学、進化ゲ

ーム理論が経済学の展開に大きな影響を及ぼしており、我々の市場観や制度観を変えつつある。なるほどたとえば進化ゲーム理論は制度を均衡としてとらえ、「複数均衡のうち、どれが選択されるかは均衡概念ではとらえられない」ということにも同意する（A. Orlean, *Analyse économique des conventions*, 2004, p.15）。しかし、戦略的合理性を超えた「何か」については、論者によって微妙に異なる。ある論者は「ネットワークへの埋め込み」によってこれをとらえようとするだろうし、別の潮流は（とりわけ企業での）「集合的学習」によってこれをとらえようとする。筆者はフランスのコンヴァンション経済学に依拠しながら、アクターの戦略的合理性からは生じえない「何か」を、慣習 *convention* として論じた。ところが、フランスのコンヴァンションナリストにしてもそのアプローチは多様である。近年の認知科学における展開を受けて、こうした慣習を体現した対象物（モノ）が経済的アクターの行為を調整するというコンヴァンションナリストがいる一方、こうした慣習の規範的側面を強調する論者もいる。筆者は、本報告でこうした議論の整理を試みた。なお、こうしたコンヴァンションナリストの議論はフランスの国立農業研究所（INRA）の研究者の間で広く普及しており、とりわけ農産物の品質についての社会経済学的研究において隆盛を見ることになった。また近年こうした研究手法はアングロサクソン諸国の農村社会学分野においても導入されている。筆者は、本報告を下に、現在、地域の特徴的農産品をめぐる経済アクター間での調整のあり方について、研究をとりまとめているところであり、我が国が推し進めつつある農産品のブランド化について、何らかの政策的示唆を与えられるのでは、と考えている。

また、本大会での個別報告の中では、梁峻豪氏（京都大学）の「金大中政権の経済改革とマクロ経済の不安定性」が特に興味深かった。これによると1980年代の民主化運動を背景にした1987年の民主化宣言を通じて、「開発独裁」による強権的賃金抑制から「協調的」労使関係へと経済システムが転換したのだという。世を挙げてのヨン様ブームなのだが、隣国の現代史と社会経済動向の展開についても、興味をかき立てられた。